

食い違う証言の先に浮かび上がる、戦慄の、真実

『殺したい子』

イ・コンニム 矢島暁子訳

少し前まで韓国の文芸界は純文学を中心に発展してきたので、国産のエンタテインメント小説は数自体が少なかったという。だがここ数年は、ジョン・ユジョン『種の起源』のような心理サスペンス、ジョン・ヘヨン『誘拐の日』のような本格ミステリ、ク・ビヨンモ『破果』のような殺し屋小説……等々、さまざまな傾向のミステリが発表され、日本へも紹介されている。そこに加わったのが、イ・コンニム『殺したい子』だ。

著者は二〇一四年に童話でデビューし、ヤングアダルト小説と童話を中心に活躍している。本書は、第八回文学トネネ青少年文学賞大賞を受賞した『世界を超えて私はあなたに会いに行く』(KADOKAWA)に続く二作目の邦訳である。

高校の校舎裏で、一年生の女子生徒バク・ソウンの変死体が発見された。現場にあった凶器のレンガについていた指紋から、前日ソウンと喧嘩をしていた同級生のチ・ジュヨン

が逮捕される。世間の怒りは沸騰し、少年法を改正しろという声が膨れ上がってゆく。そんな中、あるテレビ局がジュヨンとソウンを知る関係者たちへの取材を始めた。

その取材を受けたのは、中学時代のジュヨンの同級生、担任教師、コンビニの店長、学校の守衛らだが、彼らが証言をするたびに、ジュヨンとソウンの印象は目まぐるしく反転してゆく。ある人には、両者は親友同士に見える。しかし、別の人には、ジュヨンがソウンを奴隷の如く支配しているように見えていたのだ。彼らは皆、それぞれ自分たちのいる角度からしか両者の関係を見ていないため、証言は互いに矛盾しており、何が事実なのか読者は困惑させられる。

では当事者なら真実を証言できるのかという、ジュヨンは最初は犯行を否定していたものの、取り調べを受けているうちに、自分が殺したのかどうかはつきりわからない心理状態へと陥ってゆく。ジュヨンに接する母

親も弁護士も、彼女の言うことなど信じておらず、決めつけを繰り返すばかりである。こうして読めば読むほど事態は迷宮化してゆくのだが、その裏には取材者であるテレビ局の、ある仮説に合わせて事実を切り貼りしようとする意図が秘められており、読者も作中の大衆のように、いつの間にかある方向へと心理的に誘導されてしまうのだ。

本書では犯人探しの要素はさほど重要ではなく、真相は実に呆気なく明かされる。しかし、それを知った時、読者は大勢の人間がそれぞれ勝手に紡いだ物語と、本当に起こった出来事との乖離に空恐ろしい思いをするだろう。韓国のお国柄を反映した小説というよりは、万国共通の人間心理の怖さや弱さを抉った小説という印象だ。



アストラハウス
定価 1870円 (税込)

千街晶之